教材の径 7

文章構成の工夫を読む

―「未来をひらく微生物」（一年）を例に―

山梨学院短期大学教授
松野洋人（まつのひろと）

1 はじめに

説明的な文章（以下、「説明文」と呼ぶ）教材については、本シリーズの第四回で、「モアイは語る―地球の未来」を例に、「意見性の強い説明文」の取り扱いについて私見を述べました。今回は、「事実性の強い説明文」として標題の教材を取り上げてみたいと思います。

「事実性の強い説明文」においては、見たことや体験したこと、調査したことなどを、正確に、しかもわかりやすく伝えるために、表現上どのような工夫がされているのか、というような点を中心に学習を進めることになります。

2 文章構成を精査する

この教材で筆者が取り上げているのは、私たち人間の生活における微生物の有効性・可能性であり、そのことは一読すれば容易に確認でき、極めてわかりやすい文章です。その「わかりやすさ」は何に起因するのでしょうか。用語や文体等の平易さなども確かに一因となっているでしょうが、本稿では、「文章の構成」に焦点を当てて考えてみたいと思います。

この教材は、十八の段落で構成されていますが、「学習」欄の「2」の課題からも明らかなように、大きく三つのまとまり（序論・本論・結論）に集約することができます。

文章構成を先に示せば、序論（①～④）、本論（⑤～⑰）、結論（⑱）となりますが、第四段落と第十七段落の位置づけについては、生徒の中に異論が生まれる可能性があります。それは、国語の授業としては願ってもないことであり、じっくり生徒たちに考えさせることが重要です。新しい学習指導要領でも「文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。」（C・第一学年・(1)・エ）という指導事項を示し、「自分の考え」をもたせる対象として「文章の構成」をも明記し、重視しているのです。

文章を詳しく見ていきましょう。

序論では、第一段落から第三段落にかけて、微生物の定義や微生物と私たち人間との一般的なかかわり、とりわけ「発酵」という働きを人類が昔から利用してきたことが説明されています。

問題の第四段落では、この「発酵」が「地球環境を支えるうえでも大きな役割を果たしている」と述べ、微生物と環境との関係に言及しています。本論部分のキーワードが「環境」であることは明白ですから、この「地球環境」という言葉の提示を根拠に、この段落から本論が始まると考える生徒が生まれる可能性があるのです。しかし、本論は、「環境問題、特に廃棄物を処理する問題の解決策として、微生物の働きを利用しようとする試み」を二例紹介している部分であり、第四段落は、「発酵という微生物の働き」の例として、自然界における「地球の掃除」の働きを紹介しているのです。したがって、この段落は、序論のまとめ的役割を果たすとともに、微生物と環境との関係に視点を当てることによって、序論と本論とをつなぐ役割をも担っているとみることができるのです。

本論は、第五段落で問題を提起し、以後、前述の「解決策」を二例紹介していくのですが、前半（⑥～⑫）では、「微生物を利用して環境問題を起こさない製品を作る例」が紹介されており、主としてその原料、分解の仕組み、製品化の状況等が述べられ、エタノールの生産についても触れています。

後半（⑬～⑯）では、「汚染された環境を微生物の力で元の状態に戻す例」が示され、二つの方法が紹介されています。一つは、「そこにもともと存在する微生物に栄養や酸素をあたえ、活発に活動してもらう」方法（⑭）、もう一つは、「廃棄物を分解する能力の高い微生物をほかの場所で増やしておいて、それを汚染地域に注入する」方法（⑮）です。第十六段落は後半部分のまとめ、第十七段落は本論全体のまとめ、という位置づけです。前述したように、第十七段落を文章全体の結論部分とみる生徒がいるかもしれません。生徒たちに考えを十分述べさせる点に配慮しつつ、この部分が「環境問題の解決」に関するまとめであることに気づかせていくことが重要です。

本論部分の構成を整理してみると、「⑤本論全体の問題提起／⑥～⑪問題の解決策(1)／⑫問題の解決策(1)補足／⑬～⑮問題の解決策(2)／⑯問題の解決策(2)まとめ／⑰本論全体のまとめ」ということになります。この構成の明快さが、文章のわかりやすさの大きな力になっているのです。

3 重視したいこと（補遺）

一つは、説明内容の具体的イメージ形成に大きな力となっている「例示」への着目と、「図版・写真」の活用です。紙幅の関係で詳述することができませんが、いずれも内容の具体的理解という観点から重視したい事柄です。

二つは、本シリーズの第四回でも強調した事柄ですが、「『書く』への能力転移」についてです。つまり、この教材の読みで学んだ「構成の工夫」を、わかりやすい「説明文を書く」という学習や活動の中で生かしてほしいということです。教科書には、次に「調べたことを正確に伝えよう」という「書く」学習が設定されています。「構成の工夫」を強く意識させて取り組ませるとよいでしょう。

（注）・引用文中の傍線は筆者が付した。　・丸数字は、段落の番号を示す。